公開講座「地方自治入門」を受講して

黒羽町 諏訪 嘉彦

2004 年 6 月 22 日

１　はじめに

人数は少ない講座でしたが、受講生それぞれの立場、年代、性別がみな異なる方ばかりで､私には一つ一つの発言や提供していただいた資料が大変新鮮なものに感じられました。また、講座が自分の学生時代に経験したゼミナールの形で進められ、発言しつつ学ぶことができたことも大変楽しく感じられました。

内容は、中村先生が現場に出向いて関わられてきた市町村合併問題が４回取り上げられましたが、時宜にかなったもので興味深く学ぶことができました。

以下に市町村合併について学んでの感想を述べ、レポートに代えさせていただきます。

２　合併の機は熟している

市町村合併はそれをしないという道を選択した市町村もありますが、多くは近隣市町村との合併が決定され、準備が着々進められているところです。多くの市町村が財政面で困窮している状況を合併により打開し、更なる発展を期していこうとする判断は、特別な状況下にある市町村でない限り当然な選択であると思います。また、通信・交通の発達、経済活動の大規模化、文化の均質化ということを考え合わせても、合併が無理なく進められ、合併による行政の混乱、住民同士の反発もさして心配されない時代になってきていると思います。

３　一人の住民として合併の推移を見守っていきたいと思います。

(1) 住民の声が届く外部評価の確立

下野新聞(2004/6/1)にイーデス・ハンソン氏が「ふたたび合併を問う」という見出しで、その危惧するところを要約すると次のように書いています。

「行政が身近なところからどんどん遠い存在になるのではないか。住民主役の行政であるべきものが、執行機関・議決機関・地方官僚が主役になる行政になるのではないか」という内容であったと思います。

身近な例でいえば、私たちが村・町役場の窓口に行ったとき、市役所に行ったとき、県庁に行ったとき、職員の対応や役所の雰囲気は大きく違います。働く人の意識や官尊民卑の歴史にかかわらず、大きな役所は自然に住民にとっては威圧感を与え、対応も事務的になります。地方自治体が大きくなれば、それにつれて行政組織が大きくなり、役所の仕組みは複雑になり、組織は膨張しようとし、硬直化し住民の手の届かないものになっていく危険があります。

真に住民の側に立ったサービスが提供されるよう、住民の声が届く外部評価の仕組みと市政に関するきめ細かな情報提供の機会を作って欲しいと思います。

(2) もう一度ふるさとを見直すこと

朝日新聞(2004/6/11)に宇都宮大学で神永ネパール大使が講演したということが紹介されていました。神永氏はその中で「国力を決めるのは軍事や経済力だけではなく、豊かな自然や文化にこそ基盤となる力がある」と指摘されています。

私の住んでいる町は、過疎と住民の高齢化が進み、財政的にも窮乏している町です。しかし、我が町ならではの良さもいくつかもっています。１０年前とは比較にならないほど減少していますがまだ緑豊かな町です。ちょっと出かける時は施錠することに気を使わずに行けます。小中学校とも子どもを安心して通わせられる学校があります。町の戸籍係よりも詳しく住民の履歴に通じている古老がたくさんいます。町役場と住民は大変近い関係を保っています。

今、合併の必要性や利益についての説明会が行われていますが、それと平行して「ふるさとの良さ」を住民がもう一度確かめ、合併が実現した後どんなサービスを望むのか、そのために住民が何ができるのか、これまで進めてきた町作りはどんな町を目指してのものだったか、を整理し確認しておくことが大事ではないかと思います。小学校では市町村独自に編集された副読本を使った「ふるさとの学習」が行われています。中学校でも様々な機会に地域社会の学習が進められています。老若ともにいま一度身近な地域を振り返ることが必要な時期ではないかと思います。

行政単位が大きくなっても、それぞれの地域の良さが生かされなければ長い目での発展は望めないのではないかと思います。